

山上安見子

ベル
オム
ム

美しい男

bel homme

Yasumiko Yamaue

娘マリエと、その夫慎治さんに

もくじ

独白 その一 8

独白 その二 10

第一章 雪の匂い 12

第二章 金木犀 31

第三章 ベナレス 46

第四章 伽羅きやら 61

第五章 野分け 76

第六章 グリユーワイン 93

第七章 菊枕 107

第八章 カジュラホ 121

第九章 冬の朝 134

第十章 水仙 155

あとがき	261				
解説 高橋てつじろう	255				
牡丹寺	202				
砦の桜	198				
第十二章 惜別の笛	181				
第十一章 聖なる河	169				

スタッフ

編集 佐田 満

構成 佐田 満

画像処理 デザインオフィスはな

装丁 根本眞一・江森恵子

コピー 宇田川森和

題字 山上安見子（雅仙）

題字指導 藤井龍仙

帯文 芦原すなお

解説 高橋てつじろう

ベル・オンム(美しい男)

独白 その一

これは本当に愛なのだろうか。女は考える。あの人と居て、本当に幸せになれるのだろうか。年は二十も違う。あの人にはまだ安定した職業もない。私は可愛い子どもや何不自由のない暮らしを捨てないといけない。

でも、あの子の面影が四六時中私の頭の中をちらつく。えくぼが出来る頬。少し厚めの柔らかい唇。スツキリとした鼻すじ。そして何と言ってもあの眼だ。

今、この世に産まれたばかりのような澄んだ瞳。私の心の奥底まで見通している。いつまでもあの眼にみつめられたい。あの子が他の女性を見るだけで私は激しく嫉妬してしまう。私だけを見ていて欲しいのだ。このうずくような感情、パッションは一体どこからやってきたのか。

体中の血が下がっていくようなこの感覚。私の本能が危険を知らせている。危ない。あの人と離れる。この先には破滅が待っている。

でも、私は彼を愛さずにはいられない。どうしても一緒にいたい。それが私の定めなのだろうか。私のベロオンム。憎くもあり愛しい人。

独白 その二

僕はもうすっかり疲れてしまった。あの人の情熱に押されてここまで来たのだけれど、本当にそれで良かったのか。愛とはこんなにも苦々しいものなのか。

僕のような者を愛してくれて本当に有り難いと思う。家族を捨て、世間を捨て、僕だけのために生きてくれる。

でも、もう僕にはそれが重く感じられるんだ。あの人と一緒に居るとなんだか息苦しい。

僕がどこにいてもあの人の意識が僕に向いているのを感じる。早く帰って来て、私と一緒にいて。私は全てを捨てたのだから、あなたはもつとわたしを愛してくれるべきよ。そんな声がいつも聞こえる。

やっと弁護士になれたのだけれど、仕事は手詰まりだ。僕のように個人事務所でしか働けない若輩のもの

には、国選弁護の仕事しか回って来ない。彼女の夫だ
った人の嫌がらせも感じる。

疲れた。僕はもう疲れた。どこかに逃げ出してうずくま
ていたい。僕はもう静かに眠りたい。

第一章 雪の匂い

なだらかな山々に囲まれたカルスト台地の中央に、太古の昔に地殻変動でせき止められた谷川が細長い形の湖になった。谷川を下って湖に流れ込む水は、清く冷たい。湖の中央からは湖底を泳ぐ魚の群れが見えるほどに湖の水は透明だ。土地の人々はこの湖を「銀竜湖」と名付けた。

晩秋の晴れ間の穏やかな太陽の光と、湖を囲む山々の名残りの紅葉が湖面を末枯すがれた錦色に染めている。その湖の、そう遠くない向こう岸から笛の音が聞こえてきた。

『雅楽のようだけれど、何の曲かしら』

高子は目を凝らした。紺色のダッフルコートを着た若い男性が、岸辺の流木に腰掛けて一心に横笛を吹いているのが見える。笛の音は湖畔を渡る風がさざ波を

たてるようにじょうじょう颯々と響き、風花の舞い始めた周囲の山々をそして高子の少し渴いた胸をしつとりと濡らした。

『この笛の音は遙か遠い昔に、どこかで聞いたことがあるような……』

高子は目をつむって聴き入った。笛の音色は低く響いて深い孤独を感じさせる。と思えば舞い上がって勇壮な調子に変わる。急に流れるかと思うと、一転して静まる。

『この曲は一体何の曲かしら』

曲のテンポはだんだんと早くなる。湖の周囲の樹々も、湖面も浮き立ちざわめき始めた。高子の胸の鼓動も早くなる。笛の音は、天を舞うかのように軽やかに響くかと思えば、次の瞬間には地を這うようにすすり泣く。

『この笛の音は生きている。生きて鼓動し、戯れている。なんとも不思議な笛だわ』

突然笛の音は絶えた。演奏は終わったようだ。しかし、冬近い冷たい空気はかすかな笛の音の残響でふるえていた。高子は目をつむったまま、その音にならない音楽を五感のどこかで感じていた。高子の心はまだざわめき、さざ波が立っている。高子は自分がどこにいるのか分からなくなっていた。

「ママ、もう帰ろうよ」

娘の茉奈まなの声で高子のはっとわれに帰った。

いつの間にか冬の陽は傾き、闇と共に寒気が密やかに忍び込んできた。湖面を渡ってくる風が雪の匂いを含んでいる。対岸の青年はどこかへ立ち去ったのか、もう姿が見えない。

今の演奏は幻だったのだろうか。それとも湖を渡る風の悪戯だったのか。

「そうね、早く帰りましょう。大雪になりそうだから」

高子は茉奈の手を引いて、家族で滞在しているホテルへと急いだ。ホテルのエントランスから湖を振り返ると、濃い藍色の山々に囲まれた細長い湖が、消え行く残照に照らされ淡く鈍色にびいろに光っている。気のせいか一瞬、伝説の龍が首をもたげたように見えた。しかし、すぐに静寂が辺りを包み、湖も山々も深い眠りに落ちていった。

ホテルの部屋で、夫の義男は今度の公判の書類に眼を通していた。民事の裁判で、家庭裁判所から送られて来た案件らしい。高子と茉奈が帰って来ても「お帰り」も言わず、書類に没頭している。高子は小さなためいきをついた。

義男の分厚いレンズの縁なし眼鏡の奥の眼は細く鋭い。オールバックにしている髪には白いものが目立ち始めた。このごろは趣味のゴルフにも出かけられないためか、少し肥満気味だ。

夫とは高子が司法修習生として配属された法律事務所の指導教官として出会った。二十も先輩の義男からは教えられる事が多かった。早くに両親を亡くした高子には、年上の義男がとても頼りがいのある存在に思えた、その気持ちはやがて愛にかわり、高子が同じ弁護士事務所に就職するのを待つて二人は結婚した。

結婚してからも高子は法律事務所働いていたのだが、妊娠が分かると義男は半ば強引に退職させた。結婚して十年目によく授かった茉奈を可愛がってはいるが、妻である高子はいつまでも後輩扱いのままだ。

『いつまで、上司と部下のような関係が続くのかしら。もう、弁護士の仕事はしていないのに。茉奈にはいいパパかもしれないけど、私にとっては気難しい上司のままだわ』
高子はそっと溜め息をつく事が多かった。

今度の案件は妻側からの申し立てだった。妻に年若い愛人ができて家を出た。夫は何回も和解を申し入れたが妻は拒否し続け、離婚を家庭裁判所に申したてた。何回もの調停でも和議が成立せず、地方裁判所に審理が移された。義男は夫側の弁護を引き受けている。

「ひどい話だ。小学生の子どもを置いて若い男に走つたらしい。夫からは子どものために関係を修復しようとは何回も働きかけたんだが、奥さんは断固拒否している。一体今頃の夫婦関係はどうなってるんだらうか」

義男はときおり仕事上の相談を高子にする事がある。弁護士という同じ職業に就いていた気楽さもあるのだろう。でも、それは家族法に関係することだけで、刑事法や商法に関わる案件については決して高子には漏らさない。

「なにかよほどの理由があるのかしら。子どもを置いて母親が家を出るなんて考えられないけど」

「家出した奥さんは、パートで働きながら若い男を養っているらしい。男は小説家志望で小説を書いては文芸誌に投稿しているけど、惜しいところまでは行ってもまだ大賞は

取った事はないそうだ。それじゃあ小説家としてのデビューはむつかしいらしい」

「その女の人には魔法がかかっているのかもしれない。自分の愛する人の夢を実現するために自分を捨てて尽くすという魔法に。それがその人にとっての自己実現なのよ」

「女性ってそんなもんかね」

「うーん。そうね、よくわからないけど」

高子は曖昧にしか答えられない。義男を愛していないとは言えないが、今では熱い気持ちとはつくに失せている。義男にしても、もう高子に情熱は感じていないようだ。今のところ女性問題は起していないようだが、高子の知らないところでは、何かあるのかもしれない。

義男は弁護士仲間の付き合いには、高子をよく同伴する。そんな時高子は、意識して少し控えめに装う。落ち着いた色目の和服か、色を抑えたソフトスーツに決めている。アクセサリーはほとんど付けない。

「こいつは、てんで地味好みだね。もう少し派手にして貰いたいんだが、言うことをきいてくれないんだよ」

義男は仲間の弁護士にはそういうけれど、そんな高子に満足しているのはよくわかってる。

それでも義男は、高子のためにお茶室を作り、高子が欲しいという茶道具類は大抵買ってくれる。馴染みの茶道具屋に一緒に行き、あれこれと茶道具の値踏みをするのが好きらしい。お稽古歴のまだ浅い高子には、分不相応なほどのお道具を揃えてもらっている。でもそれは、お茶会に客を呼んで自慢したいからだ、それも高子にはよくわかっている。

高子は何不自由なく平穩に過ごさせてもらっている事には深く感謝している。時々、わけもなく物足りなさを感じてしまうこともあるのだけれど。

次の日の午後、高子と茉奈は再び散歩に出かけた。茉奈が散歩に誘うのだが、夫は出かけようとしなない。

「君たちだけで行って来なさい。僕はすこしのんびりしたい」
たまには家族でぶらぶらと散歩がしたいと、高子と思う。たわいない話をしたり、一緒

に景色を眺めたり。そんな家族を夢見て家庭に入ったのだが、現実は大大きく違ってしま
った。

うわべだけは取り繕っているものの、心は通わずひんやりと冷たいものが流れる、そ
んな夫婦になってしまった。可愛い茉奈だけが高子の救いになっている。

今日はきのうよりもさらに寒く、冷気が霧のように裸の雑木林を揺蕩たゆたうている。気温
は氷点下にまで下がっているのだろうか、イタリア製の皮の手袋をとおして痛い程の冷
たい空気が忍び込んでくる。高子は襟元に巻いたカシミアのストールに深く顔を埋めた。
都会育ちの茉奈は降ったばかりの新雪の上を歩くのが珍しいのか、さつきからしきり
はしゃいだ声を出している。

「ママ、おいかけてこしようよ。ママが鬼よ。パパもくればいいのにね」

高子の返事も聞かずに茉奈は雪道を駆け出していった。

「茉奈ちゃん、待って。転んじゃうわよ」

どんどん高子との距離は離れていく。高子はハラハラしながらも、ついこの前までよ
ちよち歩きだった茉奈がいつの間にか成長した姿を、感慨を持って眺めていた。

『大きくなったわね、茉奈ちゃん。ついこの前までよちよち歩きだったのに。今ではしつかり走れるようになってる。子どもの成長って早いものだよ』

「よし、つかまえるわよ」

高子も駆け出した。

一人の若い男性が、高子たちの前を歩いていった。紺色のダッフルコートの際元に手編みらしい白いマフラーを巻き、ポケットに手をつ突っ込んで少し肩を怒らせて歩いている。

「昨日、笛を吹いていた人だよ」

細い一本道なので、その男性の横をすり抜けることはできない。茉奈は道を外れて笹が低く茂る藪の中へと入って行った。

「茉奈、止まりなさい。危ないわ」

それでも茉奈は、藪の奥へと進んで行った。

「きゃー」

茉奈の悲鳴が聞こえた。高子は藪をかきわけ、急いで声が出たほうへ走っていった。意外に雪は深い。高子のブーツは何度も滑り、危なく転びかける。それでも高子は茉奈

の悲鳴が聞こえた方へ急いだ。

茉奈はこの地方特有のドリーネ（すり鉢状のたて穴）の底に落ちていた。足首を押さえ、べそをかいている。高子は一瞬立ちすくんだ。ドリーネの傾斜は険しく、女性では降りられそうもない。

『どうしよう、ホテルに引き返して誰かを呼んで来ようか』

その時、誰かがが高子の横をすり抜けドリーネの底まで滑り降りていった。紺色のダッフルコートを着た青年だった。その青年は茉奈に一言二言話しかけ、すぐに茉奈を背負って急な傾斜を登りはじめた。

しかし滑りやすい笹の葉に足を取られ、何度も落ちそうになる。高子は手を握りしめ、その様子を見守った。

やっと青年と茉奈がのぼってきた。青年の背中からおりた茉奈は、泣きながら高子に駆け寄ってきた。

「ママ、ママ。こわかった」

茉奈は高子にしがみついて泣きじゃくった。

「もう大丈夫よ茉奈。泣かなくていいから」

高子は涙と泥とでぐしゃぐしゃになった茉奈の顔を何度もストールでぬぐった。

「足は痛くないの」

「大丈夫、痛くない」

茉奈が涙声で答える。高子も震えが止まらない。

『茉奈が無事で本当に良かった』

茉奈の小さな体の温もりが愛おしかった。

やっと茉奈が泣きやみ、高子はお礼を言おうと顔を上げた。青年のダッフルコートは泥にまみれ顔にも、くしゃくしゃになった髪にも泥や落ち葉がこびりついてる。ふと見ると青年の頬のかすり傷からわずかに赤い血がにじみ出していた。

高子は思わず指を伸ばして青年の頬の血をぬぐった。青年と高子は間近でお互いの目を見つめ合った。

『この目を私は遠いいつか、どこかで見つめていたような気がする』

青年の眼はあの湖の湖面のように澄んでいた。しかし、同時にどこか得体の知れない

ものがその奥に潜んでいるのも感じる。

『美しい。でもこの美しさは危険だわ。決して近寄ってはいけないって、何か私に囁いている』

高子は思わず目をそむけた。これ以上あの瞳に魅入られないように。しかし青年の瞳は高子の目から消えない。

「ママ、どうしたの。ホテルに帰ろうよ」

茉奈の声がして前を向いた。すでに青年の姿はなかった。

高子は無意識に指先を舐めた。血の味がする。あの美しい青年の頬の擦り傷の血だった。その血からは若い男性のほとぼりするエネルギーと、甘美なエロスの味がした。しかし、高子は冷たい戦慄をおぼえた。何故か死の影を感じたのだ。

雑木林の向こうに冬の夕陽が落ちて、辺りはすぐに薄暗くなった。高子はまだときおりしゃくり声をあげる茉奈の手を引いて、急ぎ足でホテルまで戻った。

高子は部屋に戻ると、今日の出来事を義男に話した。

「パパ、怖かったんだよ。死んじゃうかと思った」

「そうか。茉奈、気をつけないといけないよ」と言っつて茉奈の頭を撫でると、義男はまた書類を読み始めた。部屋の中に沈黙が流れる。それは、高子に部屋を出て行って欲しいという無言のサインだ。

高子は軽く溜め息をついた。

『いつもこうだわ。いつまでも私は後輩か部下ぐらいにしか思われていない。時々、もう耐えられないと思う事がある』

しかしそんな気持ちは心の底に押し込めて、高子は茉奈を連れてロビーに降りて行った。

ホテルのロビーには家族連れが何組も居て、輪投げで遊んでいた。若いパパとママ、幼い子供たち。可愛い笑い声が弾んでいる。

「いいなあ、パパもあんな風に遊んでくれたらいいのにな」

茉奈が、羨ましそうな声で言った。

「パパは、お仕事で忙しいのよ。ママと遊びましょう」

二人で輪投げを始めたが、どうにも気分が盛り上がらない。あと一回でやめようと言うことになり、茉奈が半分ヤケのように投げた輪が前を通りかかった人の背に当たってしまった。

「あ、ごめんなさい」

振り向いた男性は、昼間茉奈をドリーネの底から救い出してくれたあの青年だった。

「あ、お兄ちゃんだ」

茉奈が嬉しそうな声を出す。

「やあ、このホテルにお泊まりでしたか」

「昼間は、ありがとうございます。お礼も言えず失礼しました」

高子はすっかり気持ち舞い上がってしまった。また、あの青年に会ってしまうは…
…。

「お嬢ちゃん、今度から気をつけるんだよ。この辺りの土は滑りやすいから。穴の底で這い上がれなくなったら大変だからね。あの辺りにはもっと深い穴があるらしいよ。落っこちたら大変だからね」

「はい」

茉奈はすっかり上機嫌だ。

「お兄ちゃん、輪投げしない」

「茉奈ちゃん、お兄ちゃんは忙しいのよ。そんな事言っちゃ迷惑よ」

「いいですよ。今日は根を詰めて勉強しすぎたので少々息抜きがしたかったです。一緒に遊びましょう」

三人で輪投げが始まった。茉奈は嬉しそうにキヤツキヤと笑い声を立てている。

青年はもう風呂に入ったようで、髪や顔の泥はすっかりきれいになっていた。擦り傷も、もう塞がりかけている。

「何て綺麗な男の子だろう。家にあるリアドロの青年像に似ている。」

その陶器は義母がフランスみやげに買ってきてくれたものだ。古代ギリシャ風の衣装を身につけ、横笛を吹くリアドロ人形は「ベル・オンム（美しい男）」と、名付けられていた。

血のつながらない仲だけでも、高子は義母を本当の母のように慕っている。義男と

親しくなつてから、義母の家の夕食に招かれるようになった。相次いで家族を亡くしてから、家庭の料理を味わうことがなかつた高子にとつて、久々の家庭の味は潤んだ心ふつくらと潤した。義母は一人暮らしの高子を何かと氣遣つてくれる。こんな人の娘になりたい。高子はそう願ひ、その想ひは実現した。もしかしたら高子は、義男よりも義母の持つ暖かみに惹かれたのかもしれない。

三人はひとしきり遊んだあと、ロビーのソファに腰掛けて、休んだ。

「お兄ちゃん、昨日笛をふいていたでしょ。あの笛はなあに」

「龍笛りゅうてきといつてね、日本の古い楽器だよ。もう千四百年以上も前に遠い外国から伝わってきた」

「きれいな音だつたね。あの曲は何て曲なの」

「あれは『蘭領王らんりょうおう』。中国から伝わってきたらしいよ」

『ああ、あの曲だったのか』

高子は思い当たつた。いつもは笙やしちりきと一緒に演奏されるので、すぐにはわからなかつたが、何度か雅楽の演奏会で耳にしたことがある。龍の頭を模した仮面を被り

緋色の装束を付けた舞人まいにんが、始めは華麗に後には勇壮に舞っていた。

『一匹の龍が何かと戯れているような曲だと思っただけれど、そう見当違いでもなかったわ』

それにしてもこの青年が吹くと、全く違う曲に聞こえた。遠く距離を隔てた違う世界から響いてくるようだった。

「その曲はすこしだけ知っています。中国の古代の大変な美男の武将の話ですよ。敵に侮られないよう、わざと怖い面を被って戦ったという、難しそうな曲でしたね。何年も練習されたのでしょうかね」

高子はなるべく青年と眼を合わさないように話した。でも、どうしても青年の方へ視線がさまよって行ってしまふ。まだ柔らかなあごの線。まつげの作る長い影に思わず戦慄さえ覚える。そして長くほっそりした指。擦り傷の跡。いつも茉莉奈の顔を撫でる時のように、あの顔にすこしだけさわってみたい。そう思いながら、会話を続けた。

「ええ、小さい頃から。亡くなった両親から教わりました」

「そう、早くにご両親をを亡くされたのね」

その境遇は高子も一緒だった。高子がやっと成人した頃、肉親は高子を残して相次いで亡くなってしまった。その頃、どんなに淋しかったか、どんなに心もとなかったことか。高子には青年の孤独がよくわかった。

「ええ、今は一人暮らしです。僕が司法試験に受かったら、亡くなった父の弁護士事務所を再建しようと思っっているのですが、なかなかうまく行きません。今はアルバイトをしながら勉強を続けています」

「まあ、司法試験受験生なのね。」

「あのね、茉奈のパパは弁護士さんなんだよ」

「へえ、そうなんですか」

「ママも、むかし弁護士をしてたんだけど、いまはお休み中なの。本当はもう一度弁護士さんをやりたいんだって」

「茉奈ちゃん、いらないうこといわないのよ」

高子は茉奈を思わず、強い調子で叱った。茉奈は口をとがらせ、ぷいっとどこかへ行ってしまった。

「お勉強、大変でしょうけど頑張ってくださいね。必ず道は開けるから」

「ええ、ありがとうございます。今は五月の短答試験にむかって勉強中です。時々龍笛を吹いては気分転換しています」

「そう、それじゃこれで失礼しますね。茉奈を探しに行かなくちゃ。今日は本当にありがとうございます。お元気で」

高子は、急ぎ足で去っていった。もつとこの青年と話を続けたい気持ちもあったが、これ以上話し続けると自分がなにかおかしな事を言い出しそうだった。忘れよう。あの青年の事は忘れよう。そう自分に言い聞かせていた。

久しぶりに、気持ちの通った会話が弾んだので青年は楽しかった。おしゃまな茉奈ちゃんは可愛く、お母さんはしつとりと優しくかった。また、どこかで会えるといいな。青年は去って行く母娘を見ながら、ぼんやりと考えていた。